

教材 6 「ニュース番組を使ったメディア・リテラシーワーク ショップ」

～メディア・リテラシー入門 「問い」を持ってメディアとつきあうために～

- ①私たちがメディア社会を生活していることに気づき、メディアについて学ぶ必要性を理解すること。
- ②メディアについて自律的に考えるための手がかり(基本概念、メディア研究モデル)について、理解すること。
- ③ワークショップという学びの場でメディア分析を経験して、基本概念を理解すること。

1 教材のねらい

メディア・リテラシーとは、市民がメディアに対する能動性を身につけ、メディアを使ってコミュニケーションをつくりだす複合的な能力のことです。そして、そのような力を育てる取り組みや教育活動をメディア・リテラシー教育と呼びます。テレビ、新聞、雑誌、インターネット、携帯電話、ゲーム、DVDなど多種多様なメディアからの情報が私たちの生活文化そのものとなっている現在、メディアを多面的に分析することを通して私たちが社会について思考し、発信していくメディア・リテラシーの学びは、生きていく上で欠くことができないと言っても過言ではないでしょう。

というのは、私たちが社会について知っていると思っていることは、直接経験すること以外はすべてメディアからの情報に依っています。しかし、例えばテレビの映像はどんなに自然に見えても、選択と技法によって構成されたメディア作品です。だが、メディア作品がメディア企業の手を経て制作され、私たちの目の前に示されていることはあまり意識されていません。

日頃、子どもたちだけではなく大人でさえ「テレビでそう言っていたから」「インターネットにそう書いていた」と、メディアからの情報を自分たちの判断や行動の根拠にしているのを目にしたことはないでしょうか。娯楽としてドラマを見てい

ても、そこで提示されている人間関係の結び方や女性や男性の生き方を自分自身と重ねて、何かしら日常生活を送る「手本」にしていることはないだろうか。

また、子どもたちの好きなテレビコマーシャルでは、延々と女性や男性の特性や役割、さまざまな人種・民族的背景を持つ人びとに対するステレオタイプ(型にはまった画一的なイメージ)な見方が提示されています。テレビコマーシャルだけではなく広告は、私たちに何かしら商品やサービスを購入することを通して、「美しさ」「健康」「やすらぎ」「人とのつながり」「幸福」を得ることができるかのように、日常的に語りかけている。

しかも、このようなメディア作品は巨大なメディア産業のビジネスとして送り出され、時には社会や政治の動きとも深く連動している。また最近では、インターネットの世界と既存のメディアが、渾然一体となって社会の動きと相互作用を起している。いま一度、メディアとのつきあい方を振り返ってみましょう。

2 メディア・リテラシーの基本概念(Key Concept)

基本概念は、メディアのさまざまな側面を表現したものです。

KC1 メディアはすべて構成されている

KC2 メディアは「現実」を構成する

KC3 オーディエンスがメディアを解釈し、意味をつくりだす

KC4 メディアは商業的意味をもつ

KC5 メディアはものの考え方(イデオロギー)や価値観を伝えている

KC6 メディアは社会的・政治的意味をもつ

KC7 メディアは独自の様式、芸術性、技法、きまり／約束事をもつ

KC8 クリティカルにメディアを読むことは、創造性を高め、多様な形態でコミュニケーションをつくりだすことへとつながる

※(鈴木みどり編『最新Study Guideメディア・リテラシー入門編』(リベルタ出版、2013)

この教材では、基本概念1、2を中心に据えています。

3 学び方

(1)ワークショップ

メディア・リテラシーの学びにおいては、学ぶものがメディアを意識化することが必要です。そのため、具体的なメディア分析を行うワークショップを提案します。

(2)メディア分析を経験して「自ら発見する」

ワークショップという学びの場を創るものをファシリテーターと呼ぶが、参加者の発言を促して多面的な「気づき」を引き出すためには、対等な関係で対話を通して新しい発見をしながら学ぶことが重要です。

4 学習の進め方(ワークショップの組み立て方)

テレビのニュース番組を使ったワークショップの組み立て方を説明します。学ぶ者がニュース番組の分析方法を学んで、具体的に実証的なデータをつくって、それにもとづいて話し合いを進めます。

ニュース番組を見て気づくのは、それが、「映像」と「音声」から構成されていることです。さらに「映像」は、人物や事物をさまざまな映像技法を使いながら構成されています。「音声」は、ナレーション、BGM、現場音などの音声技法を使いながら構成されています。このようにメディアは、実社会の人びと、出来事、考え方などをそのまま提示するのではなく、映像、音声、文字などの記号を使いながら構成して再提示しています(リプレゼンテーション)。

基本概念1「メディアはすべて構成されている」について、まず意識化するために、ニュース番組の一部(後述するように「今日1日の動き」など)を分析素材として使用しながら、映像、音声に着目しつつ、それらを「文字化」していきます。映像を文字にする作業は、初めての参加者にとっては難しく感じるかもしれませんが、実証的に根拠を持ってメディアについて語っていく上では重要な作業のプロセスです。

(1)時間配分の例

・自己紹介、進行の説明	(5分)	
・メディア・リテラシーとは？	(30分)	
・ワークショップ「メディアは現実をどう構成するか～ニュース番組の分析から」 導入(分析素材やシートについて説明)	(10分)	
映像を見ながら個人による分析	(20分)	
グループの話し合い	(30分)	
発表	(15分)	
・まとめ	(10分)	計2時間

(2)準備する物

①分析素材(テキスト)

- ・分析素材
- ・分析素材を上映するための機材、スクリーン

②ワークシート

- ・ワークシート 6-1「構成の流れ記入シート」88頁
各参加者に1枚配布。
- ・ワークシート 6-2「問いのシート」89頁
各参加者に1枚
- ・グループ用のメモ用紙(A3用紙)
- ・模造紙とマジック

③説明資料 メディア・リテラシーの基本概念などを配布してもよい。

(3)分析素材とワークシートの作り方

メディア・リテラシーにおいて分析素材は無尽蔵です。しかし、一人で分析素材(テキスト)を用意するのは非常に労力を要するので、できるだけ複数人で準備します。準備の段階から学びが始まります。

分析素材

①特定の出来事を一斉に報じる日のニュース番組を録画します。年中行事化している日の夕方、または夜のニュースを複数局録画します(たとえば、1月第2月曜日の「成人の日」、5月5日「こどもの日」、6月23日「沖縄慰霊の日」、8月6日「広島原爆投下の日」、8月9日「長崎原爆投下の日」、「総選挙翌日の日」など。できれば全局を対象に録画をし、その際には番組開始から終了までを録画します)。

年中行事化している番組を選択する理由は、その日のニュースでは「今日1日の動き」など凝縮して構成されている部分が放送される可能性が高いからです。

②録画した全番組を手分けして見て、「今日1日の動き」など各番組がその日の動きをまとめてレポートした部分があれば、それを複数選びます。分析素材の時間量は、長くても6～7分にします。

ワークシート

意識化するための具体的な手だてとして用意する、ワークシート6-1「構成の流れ記入シート」、ワークシート6-2「問いのシート」の作り方を説明します。

③ファシリテーターは自分で、ワークショップで分析素材にしようと思う番組の該当部分(「今日1日のドキュメント」など)を見ながら、時間の流れに沿って、映像と音声を、「構成の流れ記入シート」に書き出します。

ワークショップの際に使用する分析シートは、記入しやすくするためにセグメント(映像のひとつつながり)ごとに区切ります。初めての参加者は、映像と音声の両方を短時間に記入するのは難しいので、音声データを書き入れておきます。

④ファシリテーターは、分析素材を準備する過程で、分析対象の「今日1日の動き」に登場する人物、事物、それを撮るカメラワーク(カメラの位置や動き)、色調、テロップなど映像を構成する要素、ナレーション、インタビュー、BGMなど音声を構成する要素に気づくでしょう。これらの要素がすべて選択されて、どのようにして自然な流れに見えるように編集されているかに着目します。

5 学習の手順

テキストを見る前に

①ファシリテーターは、放送日時、放送局、選択した部分など分析対象について説明します。

ワークシート 6-1「構成の流れ記入シート」を参加者に配布し、記入シートはグループでの話し合いに使用するためのもので、自分用のメモであり、自分の書き方でよいこと、完璧に書き取れないのが当たり前であることを説明します。

見ながら

②次に分析対象(分析素材)を参加者に、通して見せます。

③2度目は、セグメント(映像のひとつつながり)ごとに止めて、参加者が記入する時間をつくりながら見せます。

④書き取るのが難しいようであれば、3度目を見せます。あるいは、話し合いの途中で参加者から要望があれば見せます。ここまでが個人による分析作業です。

見た後で

⑤記入したワークシート 6-1「構成の流れ記入シート」を持ち寄って、4～5人のグループをつくります。ファシリテーターは、グループで簡単な自己紹介をした後に、進行係、記録係、発表者を決めます。グループ分けや役割分担も話し合いを活性化させます。

問い

⑥ファシリテーターは用意した問い(ワークシート 6-2「問いのシート」)を説明して、グループごとに話し合いに入ります。

参加者の人数にもよりますが、おおよそ 20 分くらいをめどに発表に入ることを、あらかじめ参加者に伝えておきます。

⑦テキストがどのように構成されているか、各自が記入したワークシート 6-1「構成の流れ記入シート」を見ながら、どのような人物(性別／年齢／人種・民族的背景／社会的地位など)や事物が、どのような状況や順序で登場しているのかを分析します。

⑧どのような映像技法(カメラワークや編集、色調、テロップの使い方など)や音声技法(ナレーションやBGM、効果音など)が使われているか。それらが映像にどのような意味をつけ加えているかを分析します。

学びを深めるために

学びを深めるために、さらに次の問いに沿って話し合うこともできます。

⑨テキストはなぜ、このように構成されているのでしょうか。このニュースをめぐる政治・経済・社会・文化等の背景も考慮に入れて考えます。

⑩このニュースでは取り上げられなかったことがあるか。あるとすれば、それはなぜ取り上げられないのかを考えます。

グループでの話し合いの共有

⑪一定時間話し合った後に、各グループで話し合った内容を全体に発表します。グループごとに着目する観点が異なり、そのことから参加者は自分たちが気づかなかった点に気づくことができるでしょう。オーディエンス(視聴者・読者)の多様性にも気づくことができるかもしれません。

研修時間に余裕がある場合は、グループごとに模造紙やマジックを使って発表準備をすると、より議論が深まります。

6 役割(ファシリテーターの留意点)

・テキストを自分たちで用意することを通して、自らが分析素材の構成性について気づくことができます。すでに用意された分析素材を使用する場合でも、必ず事前に「構成の流れ記入シート」を自分で記入して試みる必要があります。

さらに、政治的・経済的・社会的・文化的な文脈について学ぶために、分析するニュースについて新聞記事やインターネットサイト、時間がある時は書籍などを通して背景となる情報や多面的な情報について学んでおきます。

ただし、ファシリテーターが学んだことについてワークショップが始まる際に多く語りすぎて、参加者の議論を「誘導」しないように注意します。

・自分なりに分析をしてワークショップに臨みますが、ワークショップではあくまでも参加者が主体的に学び、対話を通して新しい発見をするように進行します。その際に「正解を求めるのではない」こと、メディアの「意図」を読むのではなく、あくまでも自分自身が分析データにもとづいてどのように「読み解く」のかが、メディア・リテラシーの学びでは重要だということを示唆します。

・可能な限り「教える者」ではなく参加者から学ぶ姿勢をもって、話し合いを活性化させることが大切です。

・グループの話し合いの際は、質問に答えたり、話し合いが活発ではないグループを訪問して、話し合いの糸口をつくる手助けをします。

・グループからの発表の際は、印象を語るのではなく実証的に分析をしているかどうかに着目して、実証的に分析をしているグループの発言をクローズアップすることで、重要な点を示唆することができます。

・映像を文字化する理由は、メディアについて印象で話し合うのではなく実証的なデータにもとづいて、根拠をもって発言するためです。このような経験が日常生活において、「なぜ、そのように言えるのか」「誰が語っているのか」「それは誰の利益につながるのか」「もっと言えることはないのか」「取り上げられていない点は何か」というような、「問い」をもってメディアに接する態度につながっていきます。

・ファシリテーターにとってもっとも重要なことは、自分自身がメディア社会を生きる一員であり、メディアについて学ぶ必要性を自分の課題として捉えていることです。そのために、参考文献にある書籍を通して学ぶことやメディア・リテラシーのワークショップに参加して学びの経験を重ねることが、楽しく学ぶワークショップのファシリテーターになる近道です。

メディア・リテラシーワークショップでは、特に「アイスブレイク」を行う必要はないと思われます。なぜならば、個人の記入作業を終えるとグループに分かれて話し合うので、そこで自然に打ち解けることができる場合が多いからです。

7 今後に向けて～学びを深めるために

この教材では、主として基本概念の1と2について学ぶ組み立てを提案していますが、メディア・リテラシーの学びはここで終わるものではありません。鈴木みどり『Study guide メディア・リテラシージェンダー編』（リベルタ出版、2003）、『最新Study guide メディア・リテラシー入門編』（リベルタ出版、2013）を参照されると、より体系的な学び方を知ることができます。インターネットについて学ぶ際にもメディア・リテラシーの基本概念や分析モデルを使用して思考を深めることができます。

NPO法人FCTメディア・リテラシー研究所サイト

<http://www.mlpj.org/pb/index.shtml>

8 おわりに

メディア・リテラシーの学びはクリティカルなメディア分析を出発点としますが、それだけで終わるものではありません。「多様なコミュニケーション」を創り出すことが目的です。私たち一人ひとりが社会を生きる一員として社会に対して発言していく力の獲得をめざしています。

ワークシート 6-1 「構成の流れ記入シート」

メディアが構成する「現実」とは

テキスト： 放送日時__月__日 放送局 _____ 番組名 _____

	映像： 場所、登場人物の性別・年齢・人種民族的背景・外見容姿・行動／カメラワーク、テロップ(テ)、色調など	音声： ナレーションの性別・声のトーン、人物の発言内容、BGM・効果音・現場音など、インタビュー(イ)
	(例) スタジオ 女性アナウンサー(20歳代後半) グレー色のスーツ スタジオ全景からアナウンサーの顔のアップに 式典会場遠景から会場内にアップ 男性記者(40歳代) スーツではない	(例) いつもより低いトーンで 「本日、〇〇式が行われました」 ナレーション 男性 「〇〇式が行われたのは、…」 高めの声で 「集まったのは、…」

(c) NPO法人 FCTメディア・リテラシー研究所

☆配布するシートは、例文を消し、書き込めるようにしてください。

☆A3判に拡大してください。

ワークシート 6-2 「問いのシート」

メディアが構成する「現実」とは

●中心となる基本概念：

- ①メディアはすべて構成されている
- ②メディアは「現実」を構成する

○グループの問い

(1) テキストはどのように構成されているでしょうか。各自が記入した分析シートを用いて、以下の点から分析してみましょう。

- ① どのような人物(性別／年齢／人種・民族的背景／社会的地位など)や事物が、どのような状況や順序で登場するか。

- ② どのような映像技法(カメラワークや編集、テロップの使い方など)や音声技法(ナレーションやBGM、効果音等)が使われているか。それらが映像にどのような意味を付け加えているか。

(2) テキストはなぜ、このように構成されているのでしょうか。このテキストをめぐる政治・経済・社会・文化的背景も考慮に入れて考えてみましょう。

(3) このテキストでは取り上げられなかったことがあるでしょうか。あるとすれば、それはなぜ取り上げられないのか、考えてみましょう。

☆ A 3 判に拡大してください。